

物語の

方法

藤井貞和

桜楓社



物語の 方法

井貞和

桜楓社

藤井貞和（ふじいさだかず）

1942年（昭和17） 東京都に生まれる

東京大学文学部卒

共立女子短期大学助教授を経て、現在 東京学芸大学助教授

日本文学及び日本文化を担当

〈著書〉 源氏物語の始原と現在 釋迢空 深層の古代——文学史的批評—— 古日本

文学発生論 古文の読みかた 言問う薬玉 言葉の起源——近・現代詩小考——

物語の結婚 古典を読む本（国語教育叢書・5） 物語文学成立史——フルコト・カ

タリ・モノガタリ—— 落窪物語（共著） 口誦さむべき一篇の詩とは何か 反歌・

急行大和篇 「おもいまつがね」は歌う歌か（古日本文学発生論・続） 外

住所 247 鎌倉市岩瀬1616番地

物語の方法

平成4年1月10日 初版印刷

平成4年1月20日 初版発行

著者	藤井貞和
発行者	飛鳥勝幸
印刷	共信社印刷所
製本	土開製本

発行所 株式会社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町1-3-1

（郵便番号） 101 （振替） 東京 6-18020

（電話番号） 03-3295-8771（営業）

03-3295-8774（編集）

換印は省略いたしました。

©S.F. 1992 Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが落丁乱丁の際はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-273-02570-1 C1092

物語の方法
目次

【I】

物語の在りか

1「旧物語学」と「新物語学」	9
----------------	---

2 何百万ある物語	11
-----------	----

3 物語論の映画	15
----------	----

4「歴史叙述」と物語	19
------------	----

【II】

書かれる物語

1 ダフニスとクロエー	23
-------------	----

2 レウキッペーとクレイトポーン	26
------------------	----

3 神託と物語	29
---------	----

4 その他の物語	30
----------	----

5 古代散文物語の方法	33
-------------	----

【III】

語り手、聴き手、書き手と民間文芸

1 匿名の物語作者と、語り手	39
----------------	----

2 竹取物語の冒頭	43
-----------	----

3 「けり」と説話单元	47
-------------	----

【IV】 物怪の世界と人間の世界

- 1 良心と悪との隔たり 51
- 2 怨霊であることと、守護霊であることと 53
- 3 藤壺の怨霊性 55
- 4 藤壺事件の責任問題 58

【V】 密通というタブーの方法

- 1 藤壺事件の責任問題、続 61
- 2 秩序の破壊者・藤壺 67
- 3 王権のタブーと結婚のタブー 72

【VI】 文学と無常——思想的アプローチ——

- 1 無常観の起源 77
- 2 一匹の牝鹿が 80
- 3 人は花物そ 84
- 4 物の枯れゆく 86

【Ⅶ】 モノとモノガタリ——物語としての『平家』と『源氏』——

1 『語り物序説』……………90

2 モノの原義……………92

3 「物語」という作品の呼称……………96

4 物語文学はカタルことができない……………98

【Ⅷ】 源氏物語の言葉

1 物語の構造と語りの流れ……………101

2 異文化としての古文……………104

3 物語を支える隠されたもの……………109

【Ⅸ】 「草子地」論の諸問題

1 草子地なるもの……………111

2 虚構の方法として……………115

3 「草子地」論を超えて……………119

【Ⅹ】 古代・中世読者論……………123

【XI】

「けり」に詠嘆の意味はあるか

1 詠嘆を担う語は

2 日本語に沿って

3 「気づき」について

バフチンと日本文学

【XII】

1 なぜメニッペアなのか

2 言語学、文学的文体研究、民俗学

3 『源氏物語の対位法』

4 音楽のポリフォニック

5 「民衆文化」を見る眼

【XIII】

新しい研究の視野

1 「新しい」とはどういうことか

2 テクストをめぐる

3 作品／テクストという二項対立

129

130

133

137

141

146

151

154

157

160

164

【XIV】

近代小説と物語

1 「物語」の共時・複時 168

2 作者の匿名性、伊勢物語の場合 170

3 語りの文学らしさ、伊勢物語続き 173

4 語りの文学の終り 178

【XV】

現代小説と物語 私観 182

あとがき 187

索引 190

物語の方法

本書は、桜楓社創業三十周年記念事業として開講した大学院講座のうち、昭和六十一年五月二十八日から七月三十日の毎水曜日に「物語の方法」と題して講じられた講座内容を核にしている。刊行にあたり著者の補筆を得た。

【I】 物語の在りか

1 「旧物語学」と「新物語学」

「物語の方法」というタイトルがここに設けられています。物語の方法という場合に、物語という文学そのものの方法の意味と、物語を研究する方法の意味と、二通りあります。分けなければならぬにせよ、実際に二通りの「方法」は互いに固く結びついています。物語の研究方法は、これにも二通りの考え方があります。物語の研究方法はその対象に縛られる、という考え方がまずあるのではないか。ところがそうした対象によって縛られる方法に対する疑問が、六〇～七〇年代以降とみに強くなってきたのではないかと思われれます。そういう勢いはどこからかというところ、思いつくのが、ロラン・バルトの『物語の構造分析』（日本語版は一九七九年、花輪光 訳、みすず書房）という書物です。このトップに出てくる「物語の構造分析序説」というのは一九六六年に発表された論文で、七〇年の初頭には平岡篤頼による日本語訳が出て、よく読まれました。そのなかでロラン・バルトは、対象によって縛られていく研究の方法を厳しく糾弾している。対象に縛られるというのは、言ってみれば作品対象を集め読んでその中から研究方法を帰納していくという方法です。

それに対してロラン・バルトは、そうではないのだ、方法というのは演繹的に行うものなのだ、理

論を仮説として立てて研究を進めていくべきだ、と提唱しています。従来の研究方法は実験化学をモデルにしている、つまり帰納的な方法であって、実験を重ねてそこから一般的なモデルを抽出あるいは素描^{スケッチ}していく方法だった、と言うのです。何百万ある物語をくまなく集めてモデルを作っていくというのは、しかしユートピア的なものではないのかと、厳しく批判する。

それを国文学にあてはめると、従来はロラン・バルトに糾弾されている方法を多くやってきたことになりました。つまり、物語を恣意的に集めて、モデルをそこから作り出すというユートピアの方法をやっている。それはあえていうならば「旧物語学」ということになります。親しみを込めて、「旧物語学」と呼んでみようと思います。それに対してロラン・バルトのような、旧い学を批判する物語学を「新物語学」と呼んでみることができます。国文学の歴史は千年以上あるので、近ごろ起こったそのような変化は、千年の歴史から見れば微々たる長さであるにせよ、私どもは同時代に生きて呼吸しているのだから、放っておけない重要な変化でした。

しかし、実は「新国文学」の動きなら、日本で六〇年代から始まったものではないのであって、「旧国文学」に最初に批判の矢を放った、日本文学協会に属する研究者たちの戦後国文学の活躍はそれであった、と言えましょう。風巻景次郎は先駆的に、研究者主体による研究を主流とすべきであるとし、西郷信綱は積極的に研究の方法を先立てるという研究の在り方を実践しました。この方面をさらに主導し、研究者主体を拒む作品の異和に挑戦するのもまた研究者主体であることを宣告して研究の今後を切り拓いたのは若い秋山虔らでした。

六〇～七〇年代に、ほかでもないその「作品」あるいは「研究者主体」にメスが入られる新しい

時代が到来したように見えます。その頃から「作品」や「研究者主体」を軽視あるいは否定するような口吻を漏らす一群の新進研究者が出て来て、研究の対象は「作品」じゃないテキストだ、快楽だ、
と言いつつ出しました。それもまたロラン・バルトの考え方、ただし彼の後期の考え方に拠るものなので
すが。

私としては、「作品」あるいは「研究者主体」にメスを入れるべきであることに賛成します。しかし、だからといって、「作品」あるいは「研究者主体」を軽視または否定することには賛成できません。「作品」や「研究者主体」を手離しては「旧国文学」の批判すらおぼつかなくなってしまうのでは
ありませんか。私は「テキスト」を新しい視野に入れながら、研究者主体という「方法」に踏みと
どまります。

2 何百万ある物語

ロラン・バルトの「物語の構造分析序説」の最初のところをすこし眺めてみましょうか。新しい物語
語学者たちがどういったものを物語と考えているかを見ていきたいと思います。それを見ますと、
「神話、伝説、寓話、御伽話、短篇小説、叙事詩、歴史、悲劇、正劇、喜劇、パントマイム、絵画、
焼絵ガラス、映画、続き漫画、三面記事、会話」、それだけのものを挙げています。抒情詩はこのなか
にはいっていない。そのことは分かりやすい。音楽のようなものもまた出てきていません。音楽的要
素を持ちこむ種類はそのなかにいくらかもあるにせよ、とりたてて音楽そのものを挙げていないことに

気がつきます。それらのものは除かれるが、十いくつかのジャンルが挙げられている。こういうものまで含めれば、たしかに現在に至るまで、何百万もの物語が生み出されている、ということになります。

「続き漫画」はわれわれには劇画という名で親しまれています。劇画的なものを持続させ、読者を引きつけていく力として物語があるのだと言われると、なるほどと納得させられます。それに対して、一コマ漫画のような散文詩的な漫画と言うか、そういったものは除かれています。とにかくに劇画が「物語」であるということはわかりやすい。

それから「三面記事」について。新聞には毎日のように殺人事件のことが載っています。奇異なある事件が毎日のように報道されていく在り方は物語的だ。「続き漫画」に似ている点から、「三面記事」にも「物語」があるのだということを得ることができます。有名な事件と言いますと、ロサンゼルスでの保険金当ての殺人事件と言われるのは、物語的な経過を辿って大きな社会問題となつて行きました。

三浦和義は『不透明な時』と題する自叙伝的な物語を書き、妻である良枝さんも『ドラキュラの花嫁』という物語を出版するという、物語が物語を生んでいく面白い状況を呈しました。このように新聞記事というのは大いに物語の範囲にはいつてくる。ロラン・バルトが「三面記事」といったのはその意味ではないかと思えます。

「会話」というのは、漫才の記録などを見ていくと、意外な発展をするとか、物語を持つて展開しているものがあります。高級な対談といったものには物語的なうねりを感じさせる場合がある。

「絵画」については、カルパッチョの「聖ウルスラ伝」が挙げられています。この絵は全体で九面

になります。最初の一面の絵が、二七五×五八九cmの大きな壁画で、そのような大きいのが九面続く。それらの連続する絵が「物語」になっている。その内容は、聖女が殉教するという予言を得て、最後にその通りに聖女となるという中世的な物語です。こういう絵の制作にはパトロンのいて、ヴェネチアにいくつもあった宗教団体の中の有力な氏族が宗教画を描かせたと言います。その中のスクオーラ・ディ・サン・トルソラといわれる宗教団体の後援者ロレダン家が援助して、自分たちの戴く聖女ウルスラの物語を描かせたのが「聖ウルスラ伝」でした。聖女を拜むのは日本でいえば、聖^{ひじり}や上人を崇めるのに同じことでしょう。

第一面の絵を見ますと、左側の枠の外に立っている人、これはロレダン家の中心人物のようで、絵の中にいながら枠の外にいる。パトロンのですから、語り手というのは変ですが、この左側の枠の外や、やや内側にいる人々というのはロレダン家に関係する人々で、言ってみれば「草子地」的な人物です。中央に王が使節を謁見している場面。一番右側がウルスラで、ウルスラが寝室で父王と話をしている。指を折って数えているのは結婚の条件だそうです。その条件は三つあって、貞節な女性十人とウルスラに各々千人の侍女を集めること、結婚までに三年の猶予を与えて聖都への巡礼を許すこと、そして王子とその部下が受洗すること。その寝室の前には階段があり、下水口のような口が見えていて、物語そのものがやや立体になっている、そういった場面が第一の絵です。

二枚目は、結婚を承諾されて使節が帰っていくところ。使節の顔へ当たっている光の具合や階段の影の具合がすばらしく、鑑賞する人はそういったところを見ていく。ここではこの絵が物語絵だというところが大切でしょう。

三枚目は、使節がイギリスへ帰って復命しているところです。実物は横五メートル近くの大きさで、それは圧倒的なものだと言います。大きいということが、「聖ウルスラ伝」の物語を浴びるようにして享受できる力になっているのではないか。

殉教伝ですから夢とか予言とか、そういうものがしばしば出てくる、それが四枚目の絵になります。右側に夢の中へあらわれた天使が出ています。聖女となることと引きかえに、過酷な殉教を経なければならぬという予言を受けているところ。

五枚目は、ローマへの船出の絵で、画面の中央に傾いた船が描かれているのはどういうことでしょうか。その象徴的な意味はわかりにくくなっています。これから物語が暗転していくことを傾いた船は象徴しているのかとみておきましょう。

六枚目の絵、ウルスラ一行がローマの教皇に謁見している場面では、端正な遠近法が用いられます。七枚目は巡礼途中に、フン族包囲中のケルンに着いたウルスラ一行。後にフン族に虐殺され、聖女となることを暗示しています。次の絵は、殉教と埋葬。中央右寄りのポールによって、横に長い画面を二つに分けています。左側に、フン族による一万一千人の虐殺が描かれます。九枚目の絵が最後に殉教を経て聖女ウルスラになるという場面です。

難しい例はそれぐらいですか。他の例、「神話」「伝説」「寓話」などがいずれも「物語」を持っていることは分かりやすい。さらに「歴史」がはいっていることは注意されるところで、いわゆる「歴史叙述」の問題をこのさきに引き寄せます。後述します。